



渋沢栄一『論語講義』総説 訳注稿（1）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-05-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 重信, あゆみ, 池内, 早紀子, 山本, 優紀子, 孔, 令竹, 小山, 瞳, 梁, 慧穎, 周, 寧寧, 范, 倩彤 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017691

洪沢栄一『論語講義』総説 訳注稿（1）

重信あゆみ、池内早紀子、山本優紀子、孔令竹、
小山瞳、梁慧穎、周寧寧、范倩彤（順不同）

大阪府立大学人文学会 人文学論集 抜刷

第40集（2022年3月）

渋沢栄一『論語講義』総説 訳注稿(1)

重信あゆみ^{adfg}、池内早紀子^b、山本優紀子^{ad}、孔令竹^e、
 小山瞳^c、梁慧穎^b、周寧寧^b、范倩彤^b (順不同)

- a. 大阪府立大学
- b. 大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科
- c. 関西大学大学院文学研究科
- d. 立命館大学衣笠総合研究機構白川静記念東洋文字文化研究所
- e. 大阪府立大学卒業
- f. 森ノ宮医療大学
- g. 藍野大学

本稿は、渋沢栄一『論語講義』の「総説」部分に訳注を施したものである¹。

【凡例】

- ①底本は渋沢栄一『論語講義』（二松学舎出版部、1925年）を用いた。また、『論語』の本文に関しては、適宜、程樹德撰『論語集釈』（中華書局、1997年、新編諸子集成）、『林點四書集注 論語』（須原屋茂兵衛等刊、1808年）などを参照した。

1 『論語講義』に関しては、笹倉一広氏が「渋沢栄一『論語講義』の書誌学的考察」の中で、「『講義録』連載の渋沢栄一の論語の講義は、尾立維孝※が『実験論語処世談』に基づいて起稿したものであることを明らかにした。（『言語文化』48巻、2011年、144頁）さらに、同氏は「今日我々が『論語講義』で目にするものは種本は渋沢のものとはいえ、尾立の文章のままなのである」（同上）と、『論語講義』が尾立の作成した原稿をそのままで刊行したことを示している。そのうえで、笹倉氏は「渋沢栄一『論語講義』原稿割記（1）論語総説」で「渋沢の書き入れを翻字し、初めて明らかにするとともに、刊行されている渋沢『論語講義』と、『稿本』や渋沢の書き入れを比較し、考察を加える」（『言語文化』49巻、2012年、110頁）と、刊行されている『論語講義』について、書誌的な比較考察を行っている。しかし、その本文の注釈までは行われていない。本稿では、笹倉氏の論稿を踏まえ、本文に注釈をつけていく。

※尾立維孝に関して、『論語講義』の例言の中で「筆述者尾立維孝氏は。明治十年十月十日。我が三島中洲先生二松学舎創立の時の門人なり。後ち司法省法律学校に入り。法官たること三十年。任滿ちて退き。母校の爲めに教鞭を執り。傍ら澁澤子爵の論語講話を筆述す。今茲六十六歳の老齡なるも。精力絶倫。日夜孜孜として。只管講話の意義に違はざらん事を勉めらる。然れども仍は筆意に隨はざるものあるを嘆かる。是れ讀者諸君の諒恕を請ふ所なり」と記載されている。

- ②本稿の使用文字は、【本文】及びルビは原本に従い、【現代語訳】と注は、通行の文字とする。
- ③註の部分では、原文と書き下しは旧字体を用い、書き下しの送り仮名部分は新仮名遣いとした。
- ④書名は、新字体で記載した。
- ⑤注釈部分でさらに注釈が必要であると考えられる箇所には「※」として、注釈を加えた。

【本文】

ろんごそうせつ
論語總説

ろんご な かんじよげいもんし いは んんご こうし ていし じじん おうたう およ ていしあひとも い
論語の名は漢書藝文志に云く²。論語は孔子が弟子や時人に應答し。及び弟子相與に言ふ
て夫子に接聞せし語なりと³。則ち論語は後世の祖録、語録、問答録の如きものなり。但

2 「漢書」芸文志

論語 古二十一篇。出孔子壁中、兩子張。

齊二十二篇。多問王、知道。

魯二十篇、傳十九篇。

齊說二十九篇。

魯夏侯說二十一篇。

魯安昌侯說二十一篇。

魯王駿說二十篇。

燕傳說三卷。

議奏十八篇。石渠論。

孔子家語二十七卷。

孔子三朝七篇。

孔子徒人圖法二卷。

凡 論語 十二家、二百二十九篇。

論語者、孔子應答弟子時人及弟子相與言而接聞於夫子之語也。當時弟子各有所記。夫子既卒、門人相與輯而論纂、故謂之論語。漢興、有齊、魯之說。傳齊論者、昌邑都尉龔奮、少府宋畸、御史大夫貢禹、尚書令五鹿充宗、膠東庸生、唯王陽名家。傳魯論語者、常山都尉龔奮、長信少府夏侯勝、丞相韋賢、魯扶卿、前將軍蕭望之、安昌侯張禹、皆名家。張氏最後而行於世。

※2017年1月12日、中国江西省の文物考古研究所は、前漢（紀元前206年～8年）の第9代皇帝、劉賀が埋葬された同省南昌市の海昏侯墓で出土した竹簡の中から、1回目の赤外線スキャンの結果、約1800年前に消失した「齊論語」とみられるものが見つかったことを明らかにした。中国中央テレビのニュースサイトが伝えた。このことについては、王楚寧、張予正、張楚蒙「肩水金閼漢簡《齊論語》研究」（『文化遺産与公衆考古』第4輯、66～74頁、2017年）にまとめられ、論文として発表された。

- 3 「漢書」芸文志では論語の説明として、「論語者、孔子應答弟子時人及弟子相與言而接聞於夫子之語也。當時弟子各有所記。夫子既卒、門人相與輯而論纂、故謂之論語」とあるので、論語の説明としては、「當時弟子各有所記。夫子既卒、門人相與輯而論纂、故謂之論語」の部分も必要であろう。渋沢が句点をつけていないことは、関係があるかもしれない。

し書中しよちゆうに此この外ほかに孔子こうしの平生へいぜいの起居動靜ききどうせい若くは處世しよせいの方法手段ほうほうしゆだんを詳記しやうきしたれば孔子こうしの言行げんかう録ろくと見るも亦可みなり。我邦わたがくにの石川竹屋いしかはちくがい⁴曰く。論ろんは議ぎなり説せつなり。紬繹ちゆうえき⁵討論たうろんするなり。語ごは午ごなり。言ことば。交午かうご⁶するなり⁷。説文せつもん、論難答述ろんなんたうじゆつ⁸なり。其書そのしよに名なづくるの義ぎは。語ごの字じを主しゆとなす。凡すべて言ことばの以もつて教おしへとなすべき者ものは、皆みな之これを語ごと謂いふ。夫子ふうし平生しへい門人もんじん弟子でしと言ことふは。皆みな先王みなせんわうの道みちを語かたる所以ゆゑなり。故ゆゑに之なを名なづけて語ごと曰いふ。此この他た。國語こくご⁹、家語けご、新語しんご¹⁰の如ごとき。其義そのぎ相同あひなじ。思おもふに我邦わたがくにの源語げんご¹¹、平語へいご¹²又は勢語せいご¹³の如ごときも蓋けだ

4 生没1794～1844。江戸時代後期の儒者。『津市文教史要』（津市教育委員会、大和学芸図書、1980年）に収録されている。以下に引用する。

之襲は石川丈山七世の孫なり。父を之喬といひ、之襲を膳所に生む。幼にして機警、句読を家庭に受け、旁ら弓劍に及ぶ。出でて某医家に内弟子となりしも、去りて琴春樵に就きて詞賦を習ひ、慨然として天下第一等の道を学ばんと欲し、春樵の紹介によりて村瀬栲亭に入門す。時に齡十四歳なり。これより日夕經史を誦誦し、特に心を論語に潜む。十六歳の時皇大神宮を拝し、帰路津城下に滞留して、永田蘿道に琴を学ぶ。此の時、津藩士朝山義信によりて、藤堂光寛・津阪孝綽に見えしが、孝綽之を奇とし、携へて高兌に謁し、為めに請ふ所ありしかば、俸米を給はりて学資に充てしめらる。之襲感激し、栲亭の塾に還りて研修益々力む。時に文化六年なり。之襲、師より少きこと五十歳、相視ること祖孫の如く、殊に愛育せられ、修学の余暇、屢師に隨うて畿内に旅行し、又関東諸国にも從遊し、見聞より觸発する所多し。栲亭の没するや、墓誌を撰し、又遺著を考訂編次し、その緒に就く。入塾せしより此に至る迄十四年なり。……(267頁～268頁)

また、『孝經發揮』を上梓したり、古本『論語集解』を模刻している。

5 「燕見紬繹、以求答愆」とあり、これに対して、顔師古は、「紬讀曰抽。紬繹者、引其端緒也」と註を施している。([漢書] 卷八五)

6 交午とは「縦横交錯」という意味であろう。
『春秋穀梁伝』昭公十九年に「羈貫成童、晉范寧注、羈貫、謂交午剪髮以爲飾」とある。さらに、唐 段成式『柔脚解籍戲呈飛卿』詩之一に「良人爲漬木瓜粉、遮卻紅腮交午痕」、宋 洪適『夷堅甲志』高俊入冥に「二徑交午、不知所適」と「交午」が縦横に交錯する様子である例が掲載されている。

7 『説文解字』に「論也」とあり、つづいて、「徐※曰、論難曰語。語者、午也。言交午也。吾言爲語、吾、語辭也。言者直言、語者相應答」とある。

※徐とは徐鉉のことで、『宋史』列伝に「鉉精小學、好李斯小篆、臻其妙、隸書亦工。嘗受詔與句中正、葛湍、王惟恭等同校説文」と、『説文解字』を校訂したことが記載されている。

8 言直言曰言論難曰語从口平聲凡言之屬皆从言。([説文解字] 卷四)

9 吳章昭注。昭字宏嗣。雲陽人。官至中書僕射。三國志作韋曜。裴松之注謂爲司馬昭諱也。國語出自何人。說者不一。然終以漢人所說爲近古。所記之事。與左傳俱迄智伯之亡。時代亦復相合。中有與左傳未符者。猶新序說苑。同出劉向。而時復抵牾。蓋古人著書。各據所見之舊文。疑以存疑。不似後人輕改也。([四庫全書提要])

10 舊本題漢陸賈撰。案漢書賈本傳。稱著新語十二篇。漢書藝文志。儒家陸賈二十七篇。蓋兼他所論述計之。(中略)今但據其書論之。則大旨皆崇王道。黜霸術。歸本於修身用人。其稱引老子者。惟思務篇引上德不德一語。餘皆以孔氏爲宗。所援據多春秋論語之文。漢儒自董仲舒外。未有如是之醇正也。([四庫全書提要])

11 源氏物語

12 平家物語

13 伊勢物語

し此意ならむ。

【現代語訳】

論語総説

『論語』の名は『漢書』芸文志にいうには、「『論語』は孔子が弟子や時の人に応答したり、弟子がともに直接尋ねたものである」と。つまり論語は後世の祖録¹⁴、語録¹⁵、問答録のようなものである。ただ、書中にあるこの外の孔子の日常生活もしくは処世の方法を詳しく記したものであるので、孔子の言行録とみることもできる。我が邦の石川竹厓は次のように言っている。論は議であり説である。事物を引き出し、討論することである。語は午（ぎよ）である。交午するものである。説文、論難答述である。その書の名とした意味は、語の字を主としたからである。凡べて言を教とする者は、皆之を語と謂う。夫子（孔子）が平生門人弟子というのは皆先王の道を語るからである。ゆえに名づけて語と曰う。この他、『国語』、『家語』、『新語』のようなものである。その義は相い同じである。思うに我邦の『源語』（『源氏物語』）、『平語』（『平家物語』）又は『勢語』（『伊勢物語』）のようなものもこのような意味であろう。

【本文】

論語を編輯せしは、何人なるや。程子¹⁶曰く。論語の書は有子¹⁷、曾子¹⁸の門人に成る。

14 祖師の撰述したもの（『日本国語大辞典』）

15 宋・明以後、儒者や僧のこたばを記録した書。転じて、偉人などの言葉を集めたものなどについていう。（『日本国語大辞典』）

16 程顥（1032年～1085年）・程頤（1033年～1107年）に関しては、『宋史』卷四百二十七、列傳第一百八十六に伝記が記載されている。

17 有若少孔子四十三歳。有若曰、禮之用、和爲貴、先王之道斯爲美。小大由之、有所不行。知和而和、不以禮節之、亦不可行也。信近於義、言可復也。恭近於禮、遠恥辱也。因不失其親、亦可宗也。孔子既沒、弟子思慕、有若狀似孔子、弟子相與共立爲師、師之如夫子時也。（『史記』卷六十七 仲尼弟子列傳第七）

18 曾參、南武城人、字子輿。少孔子四十六歳。孔子以爲能通孝道、故授之業。作孝經。死於魯。（『史記』卷六十七 仲尼弟子列傳第七）

ゆえ そのしよひと に し し もつ そんしやう ざとういっさい おういは ろんご しよ たれ へんじ
 故に其書獨り二子のみ子を以て尊稱すと¹⁹。佐藤一齋²⁰翁曰く²¹。論語の書は誰の編次す

19 『論語集注』に「程子曰、論語之書成於有子、曾子之門人。故其書獨二子以稱」とある。

20 1772年～1859年、江戸時代後期の儒者。

初めの名は信行（のぶゆき）、通称幾久蔵。二十一歳の時、名を坦（たいら）、通称を捨蔵に改めた。字は大道（たいどう）、一斎は号である。安永元年（一七七二）十月二十日、江戸浜町にある美濃の岩村藩藩邸で、家老職の父佐藤信由（のぶより）と下総国関宿藩の家老蒔田（まきた）助之進の五女である母留（とめ）との間に、二男二女の次男末子として生まれた。一斎が生まれた時、長男はすでに夭折していた。十九歳の時、藩主松平乗保の近習となったが、それ以前から、前藩主の第三子で、一斎の父がその烏帽子親となった四歳年長の衡と親交があり、儒学とともに学んだ。二十歳、故あって職を免ぜられ、もっぱら儒学に精励することになり、二十二歳、大学頭林信敬に入門した。その年、この信敬が没し、嗣子がなく、幕命によって衡が林家第八代の大学頭をつぐと、一斎は、衡すなわち林述斎の門人となった。一斎と述斎の親交は終生かわらず、三十四歳、一斎は林家の塾長になっている。述斎が没するまで林家の門人という私的な立場に終始した一斎は、述斎が没した年、七十歳ではじめて幕府の儒臣となり、昌平黌の官舎に移り、この後、將軍はじめ諸大名にまねかれて講義をした。

岩村藩との関係では、五十五歳の時、老臣の列に加えられた。一斎の思想は、幕末の武士の己れを律する姿勢を窺わしめるものとして注目されるが、その儒学は陽朱陰王と評された。朱子学を奉ずる林家の塾に籍をおいたが、彼の陽明学への関心は林家に入門する以前からのもので、入門以後もしばしば陽明学者とみなされている。彼自身は、朱子学と陽明学とを対立するものとは考えず、その折衷のなかに孔孟の精神をうかがうことを求めた。著書に『言志四録』と総称される『言志録』（文政十三年（天保元、一八三〇）刊）、『言志後録』（天保八年（一八三七）以後刊）、『言志晩録』（嘉永三年（一八五〇）刊）、『言志叢録』（安政元年（一八五四）刊）がある。これらは思いつくままに箴言・所信を書きためたもので、『言志録』は四十二歳より五十二歳まで、『後録』は五十七歳より六十六歳まで、『晩録』は六十七歳より七十八歳まで、『叢録』は八十歳より八十二歳までのものである。このほか、『周易』『論語』『孟子』『大学』『中庸』『小学』『易学啓蒙』『近思録』『伝習録』などそれぞれの「欄外書」（注釈書）、また『哀敬編』『呉子副註』『孫子副註』『愛日樓文詩』などがある。安政六年九月二十四日、八十八歳で没し、江戸麻布の深広寺に葬られた。積号は惟一院成營大道居士。

墓碑には惟一先生佐藤府君之墓と刻まれている。一斎の門を叩いた者には、渡辺華山・佐久間象山・山田方谷・池田草庵・東（ひがし）沢瀉・吉村秋陽・安積良斎・河田迪斎などがあり、著書から影響をうけた者に吉田松陰・西郷隆盛がある。なかでも隆盛が「言志四録」より百一カ条を抄出して座右の誡としたことは有名である。（日本歴史学会編、『明治維新人名辞典』、吉川弘文館、1981年、457頁）

21 論語之書不知誰所編次（『論語欄外書』、水戸青山氏蔵、京都大学貴重資料デジタルアーカイブ）

る所なるを知らず。三島²²中洲先生曰く²³。論語の編次は戦國の末に成ると。其説に曰く。孟子の學ぶを願ふ所は獨り夫子に在り。而して孟子の書七篇中に詩を引き書を引くこと一にして足らず。然るに未だ嘗て論語を引かざるは何ぞや。又たゞに孟子が引用せざるのみならず。戦國間の諸子を擧げて、未だ嘗て一語も之に及ばず。乃ち知る。孟子の時はたゞ其語を傳聞するのみにて。論語はなほ未だ編を成さざりしなり。苟くも其書あらば、孟子豈に讀まざるを得んや。蓋し戦國の末。嘗て夫子を推尊する者ありて。以て爲らく。聖を去ること漸く遠く。遺書佚するに幾し。今に及んで之を輯めざれば。恐らくは遂に泯滅せんと。是の時夫子門人の子孫の四方に散在する者、猶能く其祖先の筆記する所を藏し、或ものは三四簡。或ものは五六策あり。是に於て多方面を探索し、好處に於て若干を得。此處に於て若干を得。遂に哀集して編を成す。論語は是れなり但し其人の誰なるやは知り難し²⁴と。中洲先生の説蓋し其當を得たりと謂ふべし。

22 三島中洲に関しては、「1830年～1919年。漢学者。天保元年十二月九日生る。名は毅、字は遠叔、通称は貞一郎、中洲と号し、また桐南、絵莊等の別号がある。父は正昱、備中郡窪郡（前の窪屋郡）中島村の人、源義光の後裔で、後醍醐天皇の驛を船上山に駐めさせられたる時、護衛の功を以て、備中星田の莊を賜はつた家柄で、世々村の里正である。中洲はその第二子、八歳にして孤となつた。十四歳山田方谷に從学、二十三歳伊勢の津藩に遊び、斎藤拙堂に師事した。二十七歳歸りに、翌年江戸に出て、昌平齋に入り、業を佐藤一斎、安積良斎の諸儒に受け、水本成美、広沢安任、藤野正啓、岡千仞、股野琢、松林漸らと同窓であつた。年三十歳にして師方谷の薦により松山藩に仕へて、藩学有終館曾頭より学頭に進んだ。文久中藩主板倉侯暮老の際、尊攘論起り海内洶々であつたが、中洲、主命を以て西国に漫遊し、諸藩の情状を探つた。戊辰の変に藩主朝議を蒙つたが、中洲は諸老臣を輔け周旋大いに力め、藩封絶えず再び続くことを得た。これより中洲子弟の數養を以て半生を畢へんとして虎口溪舎を設けた。明治五年法官に拜し、新治裁判所長、大審院中判事に歴任し、十年官を罷め、麴町区一番町に家塾を設け、漢学を教授し、庭に二松があつたので二松学舎と名づけ、当時慶応義塾、同人社と相並んで三大塾と称せられた。ついで東京高等師範学校教授となり、また東京帝国大学古典科の設あるや、大学教授として、重野、川田、島田、岡松、中村の諸儒と共に教鞭を執つた。明治二十九年三月東宮御用掛を命ぜられ、ついで東宮侍講に任ぜられた。当時中洲の文章益々老熟し、重野成斎、川田澗江と相並んで明治の三大文宗と称せられ、勅命により木戸孝允の碑文を撰し、累進して従三位勲二等となり、文学博士を授けられ、大正元年大正天皇御歳祈あらせらるるや、侍講故の如くで御即位の日に勲一等に陞せられた。大正四年病みて職を辞したが御優旨により宮中顧問官に任じ、内帑金一万円を賜ひ、二松学舎の資に充てしめられた。大正八年五月十二日病歿す。年九十。墓所、東京大森区池上町、本門寺境内善国寺墓地。著書には、詩書輯説、禹貢図、三天図、尚書今古文系表、漢書百官志図、明史職官志図、温史通論、明史名臣及宰相品第、古今人文集、涉獵日記、権輿雜錄、問津稿、探梅日記、探邊日録、皆夢文詩、霞浦遊藻、小図南録、南峽詩録、三日文詩、掃展日藻、消夏漫言、論学三百絶、絵原有声画集、中洲詩稿、中洲文稿、孟子講義、莊子内篇講義、史記論纂段解、日本政記論文段解、唐宋八家文段解、中庸、大学、論語、孟子、詩經、書經、易經、老子等の私録がある」と記載がある。

（『日本人名大事典（新撰大人名辞典）』第六卷、平凡社、1979年、32頁）

23 「論語の編次は戦國の末に成ると～論語は是れなり但し其人の誰なるやは知り難し」まで、三島毅『論語講義』（漢文注釈全書、第1編、明治出版社、1917年）からの引用である。

24 論語の編次は蓋し戦國の末に成る、何を以て之れを言う、孟子の學ぶを願う所は獨り夫子に在

【現代語訳】

論語を編輯したのは、だれであろうか。程子は次のように述べる。論語の書は有子、曾子の門人によって成立した。ゆえにその書は獨り二子のみ子という尊称をつけている。佐藤一齋翁は次のように言う。論語の書は誰が編次したのかわからない。三島中洲先生は次のようにいう。論語の編次は戦国の末に成立した。その説によると、孟子が学びたいと願ったのは獨り夫子のみである。だから孟子の書七篇中に詩を引き書を引くことは一つだけではない。しかしながら未だ嘗て論語を引かないのはなぜか。又た、ただ孟子が引用しなかっただけではなく、戦国間の諸子が、未だ嘗て一語も論語に言及していない。つまり知られていたのみである。孟子の時はただ語を伝聞するのみであって、論語はなお未だ編が成立していなかったのである。もしその書（論語）が成立していたら、孟子がどうしてこれを読まないことがあるだろうか。（いや読んでいたであろう）思うに戦国の末に、かつて夫子を推尊する者があり、聖を去ること漸く遠く、遺書が散佚してからしばらくたっていた。今に及んで之を纏めてられなかったら、恐らくは遂に無くなっていただろう。この時夫子の門人や子孫で四方に散在したものは、その祖先が筆記したものを保存し、あるものは三四簡、あるものは五六策あった。そこで多方面を探索し、若干を集めて編を成した。これが論語である。但し編者が誰であるかは難しいと。中洲先生の説はまさに的を得ているといえる。

【本文】

ろんご わがくに でんらい 論語の我邦に傳來せしは、あうじんてんわう じふろくねん 百濟今の朝鮮の王仁來りて論語十卷を獻す²⁵。皇太子稚郎子就て之を學ぶ²⁶。皇國の論語學あるは此に始まる。文武天皇

り、而して孟子の書七篇中に詩を引き書を引くこと一にして足らず、而るに未だ嘗て論語を引かざるは何ぞや、又たゞ孟子が引かざるのみならず、戦國間の諸子を擧げて、亦未だ嘗て一語も之に及ばず、坊記に至りて始めて之れを引く、然れども漢文の博士に出づ、是こに知る、孟子の時はたゞ其の語を傳聞するのみにて、論語は猶ほ未だ編を成さざりしなり、苟も其の書あらば、孟子豈讀まざるを得んや、蓋し戦國の末、嘗て夫子を推尊する者ありて、以爲らく、聖を去ること漸く遠く、遺書佚するに幾し、今に及んで之を輯めざれば、恐らくは遂に泯滅せんと、是の時夫子門人の子孫の四方に散在する者、猶能く其祖先の筆記する所を藏し、或ものは三四策、或ものは五六策あり、是こに於て多方探索し、彼に於て若干を得、是れ於て若干を得、遂に能く哀輯して編を成す、論語是れなり、但し其の人の誰たりしやは指名すべからざるのみ。（三島毅『論語講義』、明治出版社、1917年）

25 故受命以貢上人・名和邇吉師、即論語十卷・千字文一卷并十一卷、付是人即貢進。（『古事記』応神天皇）

26 十六年春二月、王仁來之。則太子菟道稚郎子、師之、習諸典籍於王仁、莫不通達。所謂王仁者、是書首等之始祖也。（『日本書紀』応神天皇）

大寶元年の學令に鄭玄²⁷何晏²⁸注を用ゑよとあり²⁹。隋唐の制に遵ふなり。學者之を稱して古注と曰ふ。後醍醐天皇元弘建武の際。始めて朱熹集注を傳ふ。之を新注と曰ふ。古注家は新注を罵りて。濫りに高遠に馳せ幽玄に入り陽に儒道を説けども陰に佛道を唱ふ。聖人の教に非ずと論じ。新注者流は古注を嘲りて徒らに。名物章句の末に拘泥して學道の大本を忘却す。詞章記誦の屑學問に終り。一身の爲にも國家の爲めにも役に立たずと難ず是れ世に謂ふ所の門戸の見なり。古注は夫子を去ること遠からざる時の作なれば、事實上於て真に近く取るべき所少からず。一概に棄つべからず。然れども修身齊家の實效を擧げんとするには。新注の説に従ふを以て捷徑となす。若し夫れ新注の高遠に馳せ幽玄に入りて、實用に適せざるの點あるは、往々免れざる所なれば、宜しく之を去りて孔夫子を以て標準となし。實踐躬行を以て主眼とすべし³⁰。是れ折衷學者の唱道するところにして。余の左袒する所なり。

【現代語訳】

論語の書が我が邦に伝來したのは、応神天皇の十六年で、百濟の王仁が渡來して論語十卷を献じた。皇太子稚郎子が之を学ぶと書かれていた。皇国の論語学は此から始まった。文武天皇大宝元年（701年）の學令に鄭玄何晏注を用いよとある。隋唐の制にしたがったものである。學者は之を稱して古注という。後醍醐天皇元弘建武（1333年）の際、始めて朱熹集注が伝わった。之を新注と曰う。古注家は新注を罵り、濫りに広くいきわたらせ、高尚とし、表では儒道を説いているが裏では仏道を唱えた。聖人の教えではないと論じた。新注者は古注を嘲りて徒らに、名物章句の末節にこだわり學道の大本を忘れていた。詞章記誦の學問に終り、一身の爲めにも國家の爲めにも役に立たないと非難した。これが世に謂う所の門戸の見である。古注は夫子の時代より遠くないものであるの

27 鄭玄 字康成、北海高密人也。八世祖崇、哀帝時尚書僕射（や）。玄少爲鄉耆夫、得休歸、常詣學官、不樂爲吏、父數怒之、不能禁。遂造太學受業、師事京兆第五元先、始通京氏易、公羊春秋、三統歷、九章算術。又從東郡張恭祖受周官、禮記、左氏春秋、韓詩、古文尚書。以山東無足問者、乃西入關、因涿郡盧植、事扶風馬融。（『後漢書』卷三十五）

28 晏、何進孫也。母尹氏、爲太祖夫人。晏長于宮省、又尚公主、少以才秀知名、好老莊言、作道德論及諸文賦著述凡數十篇。（『三国志』卷九）

29 凡教授正業周易鄭玄注王弼注尚書孔安國鄭玄注三礼毛詩鄭玄注左傳服虔杜預注孝經公安國鄭玄注論語鄭玄何晏注（『令集解』卷十五、惟宗直本、清原秀賢ほか写、1597年～1599年）

30 笹倉氏は、「冒頭の『論語の我邦に……』から「……隋唐の制に遵ふなり。」までは三島『論語講義』では石川竹厓曰く、として引かれる引用部分の一部。「古注家は新注を罵りて……」から「……實踐躬行を以て主眼とすべし。」までは三島の言葉の引き写し。いずれも引用であることを断らない。（笹倉一広「渋沢栄一『論語講義』原稿割記（1）」、『言語文化』49巻、2012年、116頁）と考察している。

で、事実で真実なところが少なくない。一概に捨ててしまうべきではない。そうはいつでも修身齐家の実効を挙げようとする、新注の説に従うことが近道となる。もし新注が広くいきわたり高尚なものとなり、実用に適さない点があるのは、往々にして免れない所であるので、宜しく之を取り去って孔夫子を標準とし、自ら実践することで要すべきである。これが折衷學者の唱道する所であって、そしてわたしの賛成する所である。

【本文】

けいちやうげんわ さいふちはらせいくわ いで そのもんじん はやしらさん とくがわいへやすもち その
 慶長元和の際藤原惺窩³¹出て。其門人に林羅山³²あり。徳川家康に用ひられて。其
 けいちゆうろんご ほどこ とごころ くてん どうしゆんでん しやう ひろ よ おこなわ こうせい
 朱注論語に施す所の調点を道春點道春は羅山の名也。と稱し。廣く世に行はる。後世
 らざん しそんあいつい だいがくのかみ にん ぼくふ ぶんけう つかさど すなわ てうてい いにしへ こちゆう もち
 羅山の子孫相繼で大學頭に任じ。幕府の文教を掌る。則ち朝廷にては。古より古注を用
 ひられしも。幕府にては開府以來宋學を尚びて新注を用ゆ。諸侯亦幕府に倣ひ皆新注を
 もち もつ めいじみしん ととき およ
 用ひ。以て明治維新の時に及べり³³。

31 生没1561年～1619年。「藤原肅。字は斂夫、惺窩と号す。北肉山人・柴立子・広胖翁は、別号なり。播磨の人」(原念齋著・源了圓・前田勉訳註『先哲叢談』平凡社、1994年、19頁)

32 生没1583年～1657年。「林忠。一名は信勝、字は子信、羅山と号し、又三郎と称す。文敏と私諡す。平安の人。大府に仕へ、薙髮(剃髮する)して道春と称し、民部卿法印と為る」(原念齋著・源了圓・前田勉訳註『先哲叢談』平凡社、1994年、30頁)

33 この部分について、笹倉氏は「『実験論語処世談』p208「◎徳川時代の儒学」を下敷きに尾立が起草したものとおもわれる」と述べる。(笹倉一広「渋沢栄一『論語講義』原稿記(1)、『言語文化』49巻、2012年、116頁)そこで、『実験論語処世談』「徳川時代の儒学」を確認したところ、「然し、惺窩は僧侶との確執から、遂に家康の召に応じて学を講ぜぬやうになつたので、惺窩の高足にして同じく朱子学を祖述する林羅山が、曾て僅かに十八歳の弱冠にして其師に従つて来り、家康に謁した際驚くべき博覧強記の事実を示したことがあるのを家康は覚え居られて、惺窩に代るに羅山を召し、之を博士に上せて顧問にしたのである。以後、羅山の子孫は代々朱子学の家元となり、大學頭を世襲するに至り、朱子学は徳川時代の人心を支配する上に、非常なる勢力となつたのである。新井白石、木下順庵等の如き元禄時代になつて現れた有名な学者もみな是れ朱子派の人々である。六代將軍家宣、將軍御拝受の札を行はんとし、先例により千代田城の御座所を改築せんとするや、時の勘定奉行萩原近江守重秀が府庫の空乏を理由とし、悪貨幣を鑄造して之を善貨幣と交換し、そのサヤによつて改築費を産み出させようとしたので、白石が断乎として之に反対し、大札は前殿或は白書院に於て行ふべきを主張し、其後亦萩原近江守の貨幣改鑄案に反対し、遂に之を免職にしてしまつたところなどは、経世家として白石の職見凡ならざるを示すものであるが、是みな其根柢を朱子の道德説に置くものである。

徳川時代に於ても朱子派以外の儒者が無かつたわけでは無い。伊藤仁斎の如き同じく元禄時代の儒者ではあつたが、朱子を祖述せず、宋儒の学は孔孟の意に垂くものなりとして盛んに古学派を唱道したのである。然し物茂卿と称した荻生徂徠の如きは極力之に反対したものである。然し徂徠は宋儒の弊を最も甚しく承けた儒者で、仁義道德の学は自ら国家の政道に参与する士大夫にのみ必要のものなるを主張し、農工商の如き天下の政道に干与し得ざる輩に取つて、仁義道德の学は敢て修むる必要の無いものであるかの如くにまで稽へた人である。

今日になつて少しく智慮ある者が稽へてみれば、士大夫にばかり仁義道德の学は必要のもので、農工商には仁義道德が無くつても可いものだなぞとは、苟も常識あるものの稽へ得ざることの如くに思はれるが、徳川時代には斯る思想が一般に行はれたもので、それが維新後の明治初年

【現代語訳】

慶長元和のとき藤原惺窩が出て、その門人に林羅山がいる。徳川家康に用いられて、その朱注論語に施した訓点を道春点と（道春は羅山の名である）と称し、広く世に知られている。後世羅山の子孫は相継いで大学頭に任じられ、幕府の文教を掌った。つまり古来朝廷では、古注を用いられていたが、幕府では開府以来宋学を尚びて新注を用いた。諸侯もまた幕府に倣い皆新注を用いた。そのまま明治維新の時に及んでいる。

【本文】

孔子こうしのひと人となり及び其およ経歴そのけいれきは如何いかに。曰く。孔子こうしは史記しき世家せいかに據るに。今いまを距ること二千四百七十四年前ねんぜん。魯ろの襄公じやうこう二十二年ねんに。魯ろの國くにの昌平郷しょうへいきやうすう陬邑うまに生る³⁴。初めは倉庫そうこの役人やくにん又は畜産ちくさんの役人やくにんとなり。皆みな能く其職責そのしよくせきを擧げられたり³⁵。三十五歳さいの時とき。魯ろの君きみ

頃まで伝へられ、大正の今日と雖も猶ほ算盤と仁義道德とは矛盾するものであるかの如くに思つてゐるものが少く無い。是に於てか私には論語算盤説なるものがある。」と記載されていた。(渋沢栄一『実験論語処世談』、実業之世界社、1923年、27頁)

34 孔子生魯昌平郷陬邑。其先宋人也、曰孔防叔。防叔生伯夏、伯夏生叔梁紇。紇、與顔氏女野合而生孔子、禱於尼丘得孔子。魯襄公二十二年而孔子生。生而首上圩頂、故因名曰丘云。字仲尼、姓孔氏。（孔子は魯の昌平郷の陬（スウ）邑に生まる。其の先（せん）は宋人（ひと）なり。孔防叔と曰う。防叔、伯夏を生む。伯夏、叔梁紇を生む。紇、顔氏の女と野合（儀礼を略して夫婦となること）して孔子を生む。尼丘に禱り、孔子を得たり。魯の襄公二十二年にして孔子生まる。生まれて首上圩（ウ）頂（頭の頂上の中央が窪んでいること）なり。故に因つて名づけて丘と曰うと云う。字は仲尼、姓は孔氏）

35 孔子、貧且賤、及長、嘗爲季氏史※1、料量平。嘗爲司職吏※2、而畜蕃息。（孔子、貧且つ賤なり。長ずるに及びて、嘗て季氏の史と爲り、料量すること平らかなり。嘗て司職の吏（牧畜を司つた役人）と爲りて畜蕃息す（繁殖する）。

※1史は唐、司馬貞の『史記』索隱に「有本作委吏。按趙岐曰、委吏、主委積倉庫之吏」とある。

しやうこう そのしんき もう しゆくそんさん か たたか うちま せい くに しゅうほん こうしそのあと お
 昭公³⁶其臣季、孟、叔孫三家³⁷と戦ひ打負けて齊の國に出奔せられ³⁸。孔子其後を追
 ふて同じく齊の國に赴かれ高昭子が家臣たり³⁹。齊の景公が其賢を知り將に尼谿を以
 て孔子を封じ⁴⁰大に用ひやうとしたが晏嬰⁴¹なる者ありて之を拒む因て魯に還れり⁴²。

36 三十一年六月、襄公卒。其九月、太子卒。魯人立齊歸※1之子、禍※2爲君、是爲昭公※3。
 (三十一年六月、襄公卒(しゅつ)す。其の九月、子卒す。魯人(ろひと)齊歸の子、禍を立て
 て君と爲す。是れ昭公爲り。『史記』魯周公世家)

※1 齊歸・・・昭公の母。

※2 禍・・・昭公のこと。

※魯昭公、姬姓、名禍(『史記』索隱、作禍、『史記』集解、作昭)、魯襄公之子、母齊歸(胡国女、
 歸姓、諡号齊、故称齊歸)。

(魯の昭公、姬姓、名は禍(『史記』索隱は禍に作る。『史記』集解は昭に作る)、魯の襄公の子、
 母は齊歸。(胡国の女、婦姓なり、諡号は齊、故に齊歸と称す。)

『春秋差左氏伝』には、襄公三十一年に「己亥、孟孝伯卒、立敬歸之婦齊歸之子公子禍、穆叔不
 欲……」とある。

37 魯の国の有力な家老である三桓のこと。

『漢語大詞典』では「三桓」を以下のように記載している。

春秋時魯国大夫孟孫(仲孫)、叔孫、季孫都是魯桓公的後代(子孫)、故称“三桓”。文公死後、
 三桓勢力日強、分領三軍、實際掌握了魯国的政權。『春秋左氏伝』哀公二十七年「公(哀公)患
 三桓之侈也、欲以諸侯去之。三桓亦患公之妄(妄言)也、故君臣多間。」唐劉知幾『史通』弁職
 「昔魯叟之修『春秋』也、不藉三桓之勢。漢臣之著『史記』也、無假七貴之權。」清錢謙益『拜觀
 睢陽五老図』詩「旧徳至今伝五老、豊碑何用視三桓。」

38 孔子年三十五、而季平子與郈昭伯以鬪雞故得罪魯昭公、昭公率師擊平子、平子與孟氏、叔孫氏
 三家共攻昭公、昭公師敗、奔於齊、齊處昭公幹侯。其後頃之、魯亂。孔子適齊、爲高昭子家臣、
 欲以通乎景公。(孔子年三十五、而して季平子、郈昭伯と鬪鶏を以ての故に罪を魯の昭公に得た
 り。昭公、師を率いて平子を撃ち、平子孟氏・叔孫氏と三家、共に昭公を攻む。昭公の師敗れ、
 齊に奔る。齊、昭公を乾侯に処らしむ。其の後頃之(しばらく)して魯乱る。孔子、齊に適き、
 高昭子の家臣と爲り、以て景公に通ぜんと欲す。『史記』孔子世家)

39 其後頃之、魯亂。孔子適齊、爲高昭子家臣、欲以通乎景公。(其の後之を頃(しばらく)して
 魯乱る。孔子、齊に適き、高昭子の家臣と爲り、以て景公に通ぜんと欲す。『史記』孔子世家)

40 將欲以尼谿田封孔子。(將に尼谿の田を以て孔子を封ぜんと欲す。『史記』孔子世家)

41 晏平仲嬰者、萊之夷維人也。事齊靈公、莊公、景公、以節儉力行重於齊。既相齊、食不重肉、
 妾不衣帛。其在朝、君語及之、即危言、語不及之、即危行。國有道、即順命、無道、即衛※1命。
 以此三事顯名於諸侯。(晏平仲嬰は、萊の夷維(現在の山東省濰坊市高密市)の人なり。齊の靈
 公・莊公・景公に事え、節儉(節約と儉約)力行(勤め励む)を以て齊に重んぜらる。既に齊に
 相たり、食に肉を重ねず、妾に帛を衣せず。其の朝に在るや、君の語之に及べば即ち言を危くし、
 語之に及ばざれば即ち行ひを危くす。國に道有らば即ち命に順ひ、道無ければ即ち命を衛(はか)
 る。此れを以て三事名を諸侯に顯す。『史記』管晏列傳)

※1 衛・・・『史記』正義に「衛、秤也。謂國無道則制秤量之、可行即行。」とある。

42 晏嬰進曰、夫儒者滑稽而不可軌法、倨傲自順、不可以爲下、崇喪遂哀、破產厚葬、不可以爲俗、
 遊說乞貸、不可以爲國。自大賢之息、周室既衰、禮樂缺有間。今孔子盛容飾、繁登降之禮、趨詳
 之節、累世不能殫其學、當年不能究其禮。君欲用之以移齊俗、非所以先細民也。後景公敬見孔子、
 不問其禮。異日、景公止孔子曰「奉子以季氏、吾不能。」以季孟之間待之。齊大夫欲害孔子、孔
 子聞之。景公曰「吾老矣、弗能用也。」孔子遂行、反乎魯。(晏嬰進みて曰く、「夫れ儒者は滑稽
 (饒舌)にして、軌法(てほん)とすからず。倨傲にして自らに順う、以て下と爲す可からず。
 喪を崇び哀しみを遂くし、産を破り(散財し)葬を厚くす、以て俗と爲す可からず。遊説して貸
 るを乞う、以て國を爲む可からず。大賢の息みし自り、周室既に衰え、礼樂の缺けて間有り。今、

四十二歳さいの時昭公齊ときせいこうせいに客死かくしし定公立ていこうたつと雖いへども魯ろの國くには魯ろの大夫季氏たいふきしの天下てんかとなつた⁴³に
 因より孔子こうしは季氏きしに仕つかへようとしたが。偶々たまたまやう陽虎こ⁴⁴といふ者もの季氏きしの嬖臣へいしん仲梁懷ちゆうりやうかいと隙ひまあり
 遂つひに季氏きしに反はんして再ふたたびび國くにが亂みだれて⁴⁵遂つひに仕つかへず。定公ていこうの八年ねん孔子こうし五十歳ごじゅうさいの時季氏とききしの宰公さいこう
 山弗ざんふつ擾意じやういを季氏きしに得えず陽虎やうこに因よつて亂らんをなし人ひとをして孔子こうしを招まねかしむ。此時このとき孔子こうしは往ゆか
 うとしたが遂つひに往ゆかなかつた⁴⁶。五十三歳ごじゅうさんさいの時定公孔子ていこうこうしを以もつて中都ちゆうとの宰さいとなす。一年いねんに
 して四方よんほう皆みな之これに則のつる。司空しくうより大司寇だいしこうに進すすみ⁴⁷定公ていこうを相たすけて齊景公せいけいこうと夾谷けうこくに會くわいし大おほいに國こく

孔子は容飾を盛んにし、登り降りの礼、趨詳の節を繁くす。世を累ねて其の学を殫すこと能わず。当年、其の礼を究むること能わず。君、之を用い以て齊の俗を移さんと欲するは、細民に先んずる所以に非ざるなり」と。後、景公、敬みて孔子を見るも、其の礼を問わず。異日、景公、孔子を止めて曰く、「子を奉ずるに季氏を以てすることは、吾、能わず。季・孟の間を以て之を待たん」と。齊の大夫、孔子を害せんと欲す。孔子、之を聞く。景公曰く、「吾老いたり、用うること能わず」と。孔子遂に行り、魯に反る。

43 孔子年四十二、魯昭公卒于乾侯、定公立。定公立五年、夏、季平子卒、桓子嗣立。(孔子年四十二、魯の昭公、乾侯に卒し、定公立つ。定公立ちて五年、夏、季平子卒し、桓子嗣ぎて立つ。『史記』孔子世家)

44 陽虎と孔子の姿が似ていたことが孔子世家に記載されている。「孔子狀類陽虎」

45 桓子嬖臣曰仲梁懷、與陽虎有隙。陽虎欲逐懷、公山不狃止之。其秋、懷益驕、陽虎執懷。桓子怒、陽虎因囚桓子、與盟而醜之。(桓子の嬖臣の仲梁懷と曰い、陽虎と隙有り。陽虎、懷を逐わんと欲し、公山不狃、之を止む。其の秋、懷、益々驕り、陽虎、懷を執らう。桓子怒り、陽虎、因つて桓子を囚らえ、與に盟いて之を醜す。『史記』孔子世家)

46 定公八年、公山不狃不得意于季氏、因陽虎爲亂、欲廢三桓之適、更立其庶孽陽虎素所善者、遂執季桓子。桓子詐之、得脫。定公九年、陽虎不勝、奔於齊。是時孔子年五十。(定公八年、公山不狃、意を季氏に得ず、陽虎に因りて乱を爲し、三桓の適を廢し、更めて其の庶孽の陽虎の素(もと)より善くする所の者を立てんと欲し、遂に季桓子を執らう。桓子、之を詐わり、脱(のが)るるを得たり。定公九年、陽虎勝たず、齊に奔る。是の時孔子年五十)

47 其後定公以孔子爲中都宰、一年、四方皆則之。由中都※1宰爲司空※2、由司空爲大司寇。(其の後、定公、孔子を以て中都の宰と爲す。一年して、四方皆之に則る。中都の宰由り司空と爲り、司空由り大司寇と爲る。『史記』孔子世家)

※1 中都は、『漢書』・百官公卿表に「師古曰、中都官、京師諸官府也」とある。

※2 司空は、『漢書』・百官公卿表に「如淳曰、律、司空主水及罪人、賈誼曰、輪之司空、編之徒官」とある。

威を揚ぐ⁴⁸。又魯の大夫の政を亂る者少正卯⁴⁹を誅す⁵⁰。三月にして魯大に治る⁵¹齊人聞て懼る乃ち女樂を魯君に遺る。魯君之を觀て政事に怠る⁵²。孔子遂に去る。嗚呼孔子

48 夏、齊大夫黎錞言于景公曰、魯用孔丘、其勢危齊。乃使使告魯為好會、會於夾谷※1。(夏、齊の大夫黎錞、景公に言いて曰く、「魯、孔丘を用う、其の勢いや齊を危くせん」と乃ち使いをして魯に好会を為さんとし、夾谷に会せんと告げしむ。『史記』孔子世家)

※1 夾谷とは、『史記』集解に「司馬彪云今在祝其縣也」とある。

49 孔子為魯攝相、朝七日而誅少正卯。門人進問曰、夫少正卯魯之聞人也、夫子為政而始誅之、得無失乎、孔子曰、居、吾語女其故。人有惡者五、而盜竊不與焉。一曰、心達而險。二曰、行辟而堅。三曰、言偽而辯。四曰、記醜而博。五曰、順非而澤——此五者有一於人、則不得免於君子之誅、而少正卯兼有之。〔荀子〕宥坐)

50 於是誅魯大夫亂政者少正卯(是に於いて魯の大夫の政を亂る者少正卯を誅す。『史記』孔子世家)

『史記』に「定公十四年、孔子年五十六、由大司寇※1行攝相事、有喜色。門人曰、聞君子禍至不懼、福至不喜。孔子曰、有是言也。不曰樂其以貴下人乎。於是誅魯大夫亂政者少正卯」とあり、孔子は大司寇という地位にあった。

※1 大司寇は、『漢書』刑法志の顔師古の註に「師古曰、篡殺畔逆之國、化惡難移、則用重法誅殺之也。自此以上、司寇所職也」とある。

51 與聞國政三月、粥羔豚者弗飾賈、男女行者別於塗、塗不拾遺、四方之客至乎邑者不求有司、皆予之以歸。(國政を興かり聞くこと三月にして、羔(こう)豚を粥ぐ者、賈(か)を飾らず(かけ値をしなない)、男女の行く者は塗を別にし、塗遺ちたるを拾わず(よく治まっていることの例え)、四方の客の邑に至る者は、有司に求めざれども、皆之に予うるに歸するを以てす。『史記』孔子世家)

『孔子家語』には、「三月、則鬻牛馬者不儲價。賣羔豚者不加飾。男女行者別其塗。道不拾遺、男尚忠信、女尚貞順。四方客至於邑者、不求有司、皆如歸焉」とある。また、『荀子』儒效には、「仲尼將為司寇、沈猶氏不敢朝飲其羊、公慎氏出其妻、慎潰氏踰境而徙、魯之粥牛馬者不豫賈、必蚤正以待之也。居於闕黨、闕黨之子弟罔不分、有親者取多、孝弟以化之也。儒者在本朝則美政、在下位則美俗。儒之為人下如是矣」とある。

52 於是選齊國中女子好者八十人、皆文衣而舞康樂(※1)、文馬三十駟(※2)、遺魯君。陳女樂文馬于魯城南高門外、季桓子微服(※3)往觀再三、將受、乃語魯君為周道遊(※4)、往觀終日、怠於政事。(是に於いて齊国中の女子の好(みめ)き者八十人を選び、皆文衣を衣て、康樂を舞い、文馬三十駟、魯君に遺る。女樂文馬を魯の城南の高門の外に陳(つら)ぬ。季桓子、微服して往きて観ること再三、將に受けんとす。乃ち魯君に道を周りて遊ばんと為さんと語ぐ(※3)、往きて観ること終日、政事を怠る。『史記』孔子世家)

※1 『史記』索隱には「家語作「容璣」とある。容璣とは、容姿が整っていることである。また、王肅云「舞曲名也」とある。ただ、「舞康樂」とあるので、楽曲名と踊りではないだろうか。

『礼記』樂記には「嘽譜慢易繁文簡節之音作、而民康樂」とある。

漢 劉向『説苑』には「中山之俗、以晝為夜、以夜繼日、男女切躄、固無休息、淫昏康樂、歌謠好悲、其主弗知惡、此亡國之風也。」とある。

八佾に関して、『論語註疏』に馬融が「孰、誰也。佾、列也。天子八佾、諸侯六、卿大夫四、士二。八人為列、八八六十四人。魯以周公故受王者禮樂、有八佾之舞。季桓子僭於其家廟舞之、故孔子譏之」と、八佾の舞について註している。

※2 駟とは、四頭立ての馬車のことである。

※3 微服とは、人目につかないように粗末な服装をする。

※4 索隱に「謂請周偏道路游行、因出觀齊之女樂(広く遊び歩き、齊の女樂(舞樂を演じる女性)をみたいと請う)とある。

『史記』孔子世家に「陳女樂文馬於魯城南高門外、季桓子微服往觀再三、將受、乃語魯君為周道遊、

この志はれんとして沮止せらる。好事魔多しの喩に漏れず惜しむべき哉。其後孔子は諸國を遍參し⁵³諸國の君に仕へた⁵⁴が何れも其志を行ふに足らず。已むことを得ず最終に生國の魯に歸られた⁵⁵のが哀公の十一年孔子の齡方に六十八歳の時なりき。それより五年間七十三歳までは全く仕宦の念を斷つて専ら門人を教育して道を傳へられた⁵⁶。要するに六十八歳までは其志主として政治の方面に盡瘁せられ。周の時代を

往觀終日、怠於政事」とある。これに対し司馬貞は索隱に「謂請魯君爲周偏道路游行」と解釈している。

53 『史記』孔子世家によると、孔子は、衛、陳、宋を訪れている。

54 洪沢は「仕えた」と記載しているが、『史記』孔子世家には「仕えた」という記載は見当たらなかった。

55 會季康子逐公華、公賓、公林、以幣※1迎孔子、孔子歸魯。孔子之去魯凡十四歳而反魯※2。(會(たまたま)季康子、公華・公賓・公林を逐い、幣を以て孔子を迎う。孔子、魯に歸る。孔子の魯を去ること凡そ十四歳にして魯に反る。『史記』孔子世家)

※1幣とは、幣帛(贈り物)のこと。『説文』に「幣、帛也。」とある。

※2索隱に「前文孔子以定公十四年去魯、計至此十三年。魯系家云定公十二年孔子去魯、則首尾計十五年矣。」(前文に孔子は定公十四年(孔子五十六歳)のときに魯を去った。ここに至るまで十三年となる、魯系家には定公十二年に孔子は魯をさり、始めから終わりまで十五年を数える)とある。

『説文』卷二に「逐」について、「追也。从辵、从豚省。直六切。徐鍇曰、豚走而豕追之、會意。禘、古文逐」と記載している。また、清段玉裁『説文解字註』には「追也。从辵。豕省聲。按鉉本作从豚省。鍇本、韻會作豕省。二字正豕省聲三字之誤也。直六切」とある。

56 孔子以詩書禮樂教、弟子蓋三千焉、身通六藝※1者七十有二人。如顔濁鄒※2之徒、頗受業者甚衆。孔子以四教文、行、忠、信※3。絶四母意※4、母必※5、母固※6、母我※7。所慎齊、戰、疾※8。子罕言利與命與仁※9。不憤不啓、舉一隅不以三隅反、則弗復也。(孔子、詩書礼樂を以て教え、弟子は蓋し三千、身、六芸に通ずる者七十有二人あり。顔濁鄒が如きの徒は、頗る業(わざ)を受くる者甚だ衆し。孔子、四つを以て教え、文・行・忠・信なり。四つを絶つるに、意母く、必母く、固母く、我母し。慎む所は、齊・戦・疾なり。子、罕に利と命と仁とを言う。憤せず啓せず、一隅(一端)を挙げて三隅を以て反らざれば、則ち復せざるなり※10)

※1六芸とは、礼・楽・射・御・書・数(算術)のこと。

※2『史記』孔子世家に「孔子遂適衛、主於子路妻兒顔濁鄒家」とあり、索隱に「孟子曰、孔子於衛主顔糴由、糴由之妻與子路之妻、兄弟也。今此云濁鄒是子路之妻兒、所說不同」と注がある。つまり、濁鄒は子路の妻の兄である。また、正義に「濁音卓。鄒音聚。顔濁鄒、非七十(七)〔二〕人數也」とある。

※3集解に「何晏曰、四者有形質、可舉以教」とある。形質とは「かたち」のことである。

※4集解に「何晏曰、以道爲度、故不任意也」とある。

※5集解に「何晏曰、用之則行、舍之則藏、故無專必」とある。

※6集解に「何晏曰、無可無不可、故無固行也」とある。

※7集解に「何晏曰、述古而不自作、處羣萃而不自異、唯道是從、故不有其身」とある。

※8集解に「何晏曰、此三者人所不能慎、而夫子慎也」とある。

※9集解に「何晏曰、罕者、希也(まれである)。利者、義之和也。命者、天之命也。仁者、行之盛也。寡能及之、故希言之」とある。

『易経』文言に「元者、善之長也。亨者、嘉之會也。利者、義之和也。貞者、事之幹也。君子體仁足以長人、嘉會足以合禮、利物足以和義、貞固足以幹事。君子行此四德者、故曰乾、元、亨、利、貞」とある。

※10集解に「鄭玄曰、孔子與人言、必待其人心憤憤、口排排(ひひ/口に出そうとしても言葉に

復興して以て王道を天下に施したいと云ふ事に熱心せられたやうである⁵⁷。

【現代語訳】

孔子の人となり及びその経歴とはどうか。(洪沢先生は) 次のように言った。孔子は『史記』世家による。今から二千四百七十四年前の魯の襄公二十二年(紀元前551年)に、魯の国の昌平郷陬邑に生まれた。初めは倉庫の役人又は畜産の役人となり、すべてよくその職務を果たした。三十五歳の時、魯の君昭公の臣下の季、孟、叔孫三家と戦い負けて齊の国に出奔させられ、孔子はその後、同じく齊の国に赴かれ高昭子の家臣となった。齊の景公がその賢であることを知り、まさに尼谿に孔子を封じて、大いに用いようとしたが晏嬰という者がおり孔子を拒否した。よって魯に帰った。四十二歳の時、昭公が齊で亡くなり、定公が即位したが魯の国は魯の大夫の季氏の天下であった。そこで孔子は季氏に仕へようとしたが、たまたま陽虎という者が季氏の寵臣である仲梁懷と仲たがいをした。遂に季氏に反乱を起し再び国が乱れて遂に仕えなかった。定公の八年(紀元前500年)、孔子五十歳の時、季氏の宰公山弗擾意は季氏に用いられず、陽虎によって乱をなし人に孔子を招かせた。この時孔子は往こうとしたが遂に往かなかった。五十三歳の時、定公は孔子を中都宰とした。一年で四方皆、孔子に従った。司空より大司寇に進み、定公を相けて齊景公と夾谷に会し、大に国威を揚げた。そして魯の大夫が政を乱す

ならない)、乃後啟發爲説之、如此則識思之深也。説則舉一端以語之、其人不思其類、則不重教也」とある。

57 笹倉氏は「本段は『実験論語処世談』9頁の「◎孔子は如何なる人か」の一章が下敷きになっている」と述べる。(笹倉一広「洪沢栄一『論語講義』原稿割記(1)」、『言語文化』49巻、2012年、116頁)

そこで、『実験論語処世談』の「◎孔子は如何なる人か」を確認したところ、「孔夫子は『史記世家』にもある如く今を去る約二千四百六十五年前、魯の襄公二十二年に、魯の昌平郷と名づけらるゝ里に生れられたものである。初めは、倉庫掛乃至は又畜産等の役人になられたが、成績何れも見べきものがあらせられた。三十五歳の頃、生国の魯が乱になったので、昭公が齊に奔られた後を追うて同じく齊に赴かれたところを、齊の景公が抜擢して大いに用ひようとしたが、反対者があつて用ひらるゝことが出来なかつたので、再び生国の魯に帰られたものである。然るに四十三歳に及ばれた時、魯は季氏の天下となつた。この時に、孔夫子は季氏に仕へようとしてせられたのであるが、偶々陽虎と称する者が反して又国が乱れたので、遂に仕へずに退かれたのである。ところが五十一歳に成られた時に、季氏に反いて起つた公山不狃が亦孔夫子を召すことになつた。この時も亦孔夫子は往かうとせられたのだが、遂に行かれなかつた」とある。その後も孔夫子は諸国を遍歴し、諸公に仕へて見られたが、何れも我が志を行はしむるに足る処が無かつたので、又生国の魯に戻られたのが哀公の十一年、齢方に六十八歳の時にあらせらる。それから七十三歳で逝かれるまでは全く仕官の念を断たれて、門弟を教育し道を伝えることにのみ意を注がれたのであるが、六十八歳になられるまでは志が主として政治方面にあつて、周の時代を復興し、王道を天下に布きたいといふのに熱心であらせられたものゝ如く察し得らるゝのである」と記載されている。(上掲、6～7頁)

者である少正卯を誅殺した。三か月で魯の国は治まった。齊の人は聞いて懼れた。そこで女楽を魯君に送った。魯の君は之を觀て政事を怠った。孔子は遂に去った。嗚呼（ああ）孔子の志が行われようとして阻止された。好事魔多しという喩に漏れず惜しむべきものである。そののち孔子は諸国を遍歴して諸国の君に仕えたが、何れもその志を行うに足らなかった。やむを得ず最終に生国の魯に帰られたのが哀公の十一年孔子の齡、方さに六十八歳の時であった。それより五年間七十三歳までは全く仕宦の念を断って専ら門人を教育して道を伝えられた。要するに六十八歳まではその志は主として政治の方面に全力を尽くされ、周の時代を復興して、王道を天下に施したいと伝えることに熱意を燃やされたようである。

【本文】

此れに由て之を觀れば。則ち大聖人の孔子にして魯の反臣季氏に仕へやうとし。更に又季氏の反臣公山弗擾⁵⁸の招きに應ぜんとしたのみならず⁵⁹。諸國を巡參して仕途を求めたのは、如何にも大義⁶⁰名分⁶¹を辨へざるやに見ゆ。然れども支那の國體⁶²は大に我邦と異り。萬世一系⁶³の天子あるにあらざるのみならず⁶⁴。當時戰國の際なれば、必ずしも名分のみに由り難し。孔子の志は何國にても構はぬ。又何公でも苦しからず。我道とする所王道を行ふ事を得れば足れりと決心したるに由るが如し。是れ孔夫子が其志に忠なるの致す所にして、周の時代を復興し、斯民をして鼓腹擊壤⁶⁵の樂を享けしめたい

58 『史記』孔子世家では「公山不狝」と記載される。これに対して『史記索隱』で、「狝音女久反。鄒氏云一作「蹂」。論語作「弗擾」と注される。

59 季氏亦僭於公室、陪臣執國政、是以魯自大夫以下皆僭離於正道。故孔子不仕、退而脩詩書禮樂、弟子彌衆、至自遠方、莫不受業焉。(季氏も亦た公室を僭し、陪臣 國政を執り、是を以て魯大夫自以下皆僭して正道を離る。故に孔子仕えず、退きて詩書礼樂を脩め、弟子彌々衆く、遠方自り至り、業を受けざること莫し。『史記』孔子世家)

60 『春秋左氏伝』に「大義滅親」とある。

61 『商子』定分に「故夫名分定、勢治之道也。名分不定、勢亂之道也」とある。

62 国体という言葉は、『春秋穀梁伝』莊公二十四年に「大夫、國體也」とある。注に「國體謂爲君股」(國體は君の股と爲るを謂う)とあり、君子の片腕となる家臣のことをいう。さらに『漢書』には「綱紀國體」と記載されている。

63 「万世一系」について、所氏が「『万世一系の天皇』に関する覚書」(『産大法学』39号、124～126頁、2006年)の中で、まとめられている。その中で、島善高氏の報告で、岩倉具視の王政復古議(慶応3年10月)に記載されている「万世一系」が初出とされている。

64 笹倉氏は「然れども支那の國體は大に我邦と異り。萬世一系の天子あるにあらざるのみならず。」という非常に皇国史観色の強い言葉があり、通行しているが、洪沢の『実験論語処世談』には全くない一節であり、尾立によって書き加えられたもので、洪沢は塗抹している」と述べる。(笹倉一広「洪沢栄一『論語講義』原稿割記(1)」、『言語文化』49巻、2012年、118頁)

65 有老人、含哺鼓腹、擊壤而歌曰、日出而作、日入而息、鑿井而飲、畊田而食。(『十八史略』七巻)

と。熱中せられたのである。其志は殊に生國の魯をして周の盛時に還らしめんとするに在りて⁶⁶。孔夫子の志行はれずして魯を去る時には悒爾として如何にも去り難き趣ありきと孟子も傳へて居る⁶⁷。孔夫子の當時四圍の情は實に察するに餘りありと云ふべし⁶⁸。

【現代語訳】

※当時の原文のままで使用した。

これらを見ると、大聖人の孔子に魯の反臣季氏に仕えさせようとし、更らに又季氏の反臣公山弗擾の招きに応じようとしただけではない。ことに諸國を巡歴して仕官を求めたのは、いかにも大義名分をわきまえていないように見える。しかし中国の国体は大に我邦と異なっている。萬世一系の天子があることがないだけでなく、当時は戦国の世であったので、必ずしも名分のみを根拠としているのではない。又何公でも苦しかったわ

66 後雖百世可知也※1、以一文一質。周監二代、郁郁乎文哉。吾從周。※2（後に百世と雖も知る可きなり。一文一質を以てす。周、二代を監み、郁郁として文なるかな。吾れは周に従わん。『史記』孔子世家）

※1 集解に「何晏曰、物類相召、勢數相生、其變有常、故可預知者也」とある。

※2 集解に「孔安國曰、監、視也。言周文章備於二代、當從之也」とある。

67 孔子之去齊、接漸而行。去魯、曰、遲遲吾行也。去父母國之道也。可以速而速、可以久而久、可以處而處、可以仕而仕、孔子也。（孔子の齊を去るときは、漸を接いて行るも、魯を去るときは、遲遲として吾行ると曰まえり。父母の國を去るの道なり。以て速やかなるべくんば而ち速やかにし、以て久しくすべくんば而ち久しゅうし、以て處るべくんば而ち處り、以て仕うべくんば而ち仕うるは、孔子なり。『孟子』萬章下）

68 笹倉氏は「この段は『実験論語処世談』10頁の「◎其志や察するに余りあり」の段に拠る。全体的に要約して分量を減らしている。」と述べる。（笹倉一広「洪沢栄一『論語講義』原稿割記(1)、『言語文化』49巻、2012年、118頁）

そこで、『実験論語処世談』の「其志や察するに余りあり」を確認したところ、「大聖人の孔夫子ともあらうものが、五十にして既に天命を知られた後の五十一歳になられてからまで、魯の反臣たる季氏に反いて更に起つた不狃に如何に召されたからとて往かうとされたのは、恰も名分を弁へざるもの、如くにも思はれ、其処此処と到る処に仕へ廻つた処を見ると、又、焦せられるやうにも思はれる。当時の周囲を少し注意して見廻しさえすれば、諸公の中にも士大夫のうちにも、かの管仲を用ひて其志を遂げしめた桓公の如き明君が無いらぬの事は理解りさうな筈だ、これが理解らずに処々に遍歴せられたものとすれば、孔夫子は如何にも眼の見えぬ人であつたかの如くにも思はれる。

孔夫子は素より之を十分に承知して居られたらうが、斯く志を為すに恋々たる如くあらせられたのは、是れ孔夫子が其志に忠なるの致すところで、何処でも構はぬから我が志によつて、王道の範を布かしてくれる処がありさえすれば一つ之を行つて見たい、今度こそ我が志を容れて之を遂げしめてくれるだらう、と周の時代を復興して民の鼓舞する状態を実現したいとの勃々たる熱心があつた為めである。孔夫子の情は實に察するに余りある。孔夫子の志は殊に生國の魯をして再び周の盛時に還らしめんとするにあつたので、孟子の伝ふる処によれば、孔夫子の魯を去る時には、志が行はれぬ為他に國を去る時の如く平然たる能はず、悒々として如何にも去り難さうにして去られたものであるとの事である」と記載されていた。（上掲、7頁）

けではない。我が道とする所の王道を行うことができれば十分だと思い決心しているか
のようである。実に孔夫子がその志に忠実であって、周の時代を復興し、民をして太平
の世の楽しみを受けさせたいと、熱中せられたからである。その志は特に生國の魯を周
の盛時に還らでようとするものであったが、孔夫子の志が行はれずして魯を去る時には
ゆっくりとしていかにも去り難い趣があったと孟子も伝えている。孔夫子の当時の情は
実に察するに余りありというべきである。

謝辞

本稿を作成するにあたり、丁寧にご指導いただいた立命館大学教授・大阪府立大学名
誉教授大形徹先生に心より感謝いたします。また、日頃より本勉強会に参加、ご協力い
ただきました西尾真澄さんに感謝の意を表します。

【参考文献】

1. 笹倉一広「渋沢栄一『論語講義』原稿割記(1)」、『言語文化』49巻、2012年。
2. 笹倉一広「渋沢栄一『論語講義』の書誌学的考察」、『言語文化』48巻、2011年。
3. 渋沢栄一『実験論語処世談』、実業之世界社、1923年。
4. 所功「『万世一系の天皇』に関する覚書」、『産大法学』39号、2006年。
5. 漢 司馬遷撰、宋 裴駟集解、唐 司馬貞索隱、唐 張守節正義『史記』、中華書局、1997年。
6. 原念斎著・源了圓・前田勉訳註『先哲叢談』平凡社、1994年。
7. 三島中洲『論語講義』、漢文註釈全書、第1編、明治出版社、1917年。